

はじめに

ここ数年、毎朝、私は起きてしばらくの間がとてつらい。それは目覚めるとすぐに、「ああ、こんな〈ひどい〉日本でまた1日過ごすのか!」という慨嘆にしばらくの間襲われるからだ。でも、そんな暗い気分でも1日過ごすわけにもいかないから、気持ちを入れ替えて、着替えたなら新聞を取りに行く。

だが、朝飯のあと新聞を読み始めると、また気分は憂鬱になる、信じられないような多くのニュースに遭遇する。日本・世界の情報を知るには、新聞だけでは不足だから、インターネットやフェイスブックなどのお世話になる。15年程前に定年退職してからは、それ以前の読書好きが高じて、暇な時間の大半は読書についやしてきた。

私の読書傾向・対象は、主に日本関連である。なぜかといえば、30~40歳代で労働組合の役員になり、日本の労働法制が欧米に比べきわめて後進的であることを知り、日本はどういう国で、日本人の特徴は何かといった関心が膨らんだからだ。また、高校生の頃から日本はどうして太平洋戦争という馬鹿げた戦争を始めたのかという疑問をずっと抱えていたことも大きい。そのほかの興味は、自動車産業、ファッション、音楽などだ。

これまでの読書遍歴の成果は、良書やさまざまな記事・論説にふれて、新聞・テレビでは得られない知識が増え、見識が深まったことである。細かいことは覚えられないため、ここ15年は読書ファイルというノートを用意し、厳選した分析・記事を部分的にコピーし保存してきた。その数は100冊を超えた。私の生涯の財産である。

読書遍歴を通じて、私の政治的立場はリベラル・左翼志向が確立した。私の立ち位置から見て、今の日本は政治・社会のあらゆる面で、私の理想とはかけ離れている。世界の潮流から取り残され停滞している。

まず、経済成長が止まり、賃金が上がらない。学校・会社でパワハラ・セクハラ、いじめが横行し、政治では森友・加計・桜を見る会と腐敗・墮落のオンパレード、コロナウイルス対策でも安倍前政権の能力不足が露呈した。これらの停滞状況を受け、近年、「日本は後進国」、「日本の終わり」などの論説をたまに目にする。実際、日本の多くの部門・局面で“後進国状況”を呈していることは間違いない。

後進国状況のなかでも、政治・教育・司法は特に遅れが甚だしい。政治は多くの論者が指摘しているので、さっと触れるだけにする。

なかでも、教育は改革が必要だと、50年ほど前から指摘され続けてきた。論点は、管理教育やセンター試験という大学入学選抜試験のありかた、などが中心だった。だが、ゆとり教育など小手先の手直しは実施されたが、抜本改革は依然として着手されないし、国をあげての議論はなされない。

そうこうしている間に、日本のあらゆる部門・局面で、停滞・破綻・遅れが進み、国力の低下が進んでいる。一方、40~50年前から目立ち始めた財政赤字、少子高齢化、いじめ・不登校、過労死、女性差別、格差拡大などの諸問題が、解決に向け動き出すきざしが見られない。政府は放置を決め込んでいる。このため、私は今やあらゆる問題の背景には、教育が影を落としていると考えるようになった。

なぜか？ 教育界は長年、大学入試でセンター試験という知識偏重の選抜をしている。高校を出ても、真に高卒の学力が試験されることはない。大学も同様だ。高校は大学の予備校化し、高校は底辺校、大学はFランク校というジャンルが生まれ、基礎学力がない学生を受け入れている。こうして大学卒業者の何割かは、欧米に比べて、明らかに1ランク下の学力しかない。

最大の問題は、大学までの間に個性を伸ばし、思考力・判断力を育て、自我を確立する教育をしていないことだ。また、きちんと民主主義の意味と意義を教えないために、社会で通用する成熟した大人を育てていない。

教育界が成熟した大人を十分に送り出せないと、どうなるか？ 社会のあらゆる部門・局面で混乱・遅れ・劣化が始まる。その兆候は、30年くらい前から出始めた。国の基本原理として採用した民主主義も、政治も、司法も劣化するばかりである。三権分立すら危うい状況に瀕している。

つまり、大学を最終コースとする教育が、あるべき正しい教育を実践していないために、現在の日本の停滞・破綻状態を招いたとも言える。だが、この事実にとりあえず日本人が気づいているだろうか。

真の教育を実践するには、欧州先進国でそうしているように、哲学をきちんと教育課程に取り込むことだ。哲学を高校などで教え、社会では哲学思考を大事にすることが、停滞日本を再興するキーポイントとなる。哲学思考とは、問題解決に際し、物事をじっくり観察し、ゆっくり考察し、きちんと議論し、決定することである。

近年の政府の政策で、哲学思考により決定された様子は、ほとんど見られない。多くは思いつき、その場しのぎ、従来策の手直しばかりである。それに政治の根本思想が新自由主義に立脚し、問題を個人責任・自己責任にすり替える姿勢では、格差・貧困の問題などいつまでたっても解消できない。

この本で述べる私の主張は、市井の一読書人が20年来の読書をベースに、自分なりに考察したものである。今回、浅学・非才をかえりみずこの本を書こうと考えたのは、多くの方々と一緒に真剣にこの問題に立ち向かい、日本を立ち直らせる一助になればとの願いからである。ご一読いただければ、幸いである。

2020年11月20日

菱木勤治